

中華会館編

『落地生根——神戸華僑と神阪中華
会館の百年——』

研文出版 2000年 460 + xxii ページ

りよう せき よう
廖 赤 陽

近年、日本における華僑・華人研究は確実な進展を見せている。従来、関連研究の主な対象地域は東南アジアであり、かつ主な問題関心は華僑・華人の経済活動にあった。しかし、1980年代以降、より多くの学者の視線は日本国内における華僑・華人社会に向けられるようになった。問題関心は商業・貿易史のほか、社会組織、政治、文化、社会生態、受け入れ側の法的制度などの広がりを持っている。たとえば、神戸では、貿易史のほか、華僑ナショナリズムやアイデンティティの変容に関する研究が大きな特色の一つである。こうした「神戸特色」を見事に彩った新たな一筆が本書であろう。

本書は、5章、付録、年表、文献目録などによって構成された大著である。

「はじめに」では、3つのキーワードを掲げている。第1に、国内外における連続的移動の中で、中国人の社団としての「会館」を歴史的に位置づける。第2に、中国、日本、日中関係史、という3つの近代史の交錯によって織り出された「中華」を、国民国家の形成とナショナリズムの高揚という時代的背景において把握する。第3に、「神阪」という開かれた地域概念を設定し、中華会館のような個別の華人組織の歴史復元にとどまらず、より広い時空の枠組みにおいて、神戸と大阪の華僑・華人史を捉えている。

第1章では、東アジアの開港から中華会館の成立にいたるまでの華僑・華人の進出の経緯、および神阪における華僑社会組織の形成やその対外的商業ネットワークの広がりを叙述している。第2章では、創設から日中戦争にいたるまでの中華会館の全盛期の歴史が展開される。第3章は、日中戦争の勃発と

日本側の華僑取締の強化、華僑団体の再編、空襲による会館の焼失など、同地華僑に最も厳しい試練が与えられた時期の歴史を記録している。第4章では、戦後の復興から阪神大震災後の会館再建にいたるまでの華僑社会の歩みを克明に記録し、日本を永住の地として「落地生根」になった華僑・華人の、神阪地域社会および21世紀に向けての日中関係に果たす役割について展望している。第5章は、同会館が管理している墓地と寺院、および華僑のアイデンティティの持続性を内面から支えてきた祭祀活動について述べている。

付録の華僑団体の規約・章程、および神戸華僑史年表、神戸華僑華人に関する文献目録は、いずれも高い史料・参考価値のあるものである。なお、本書は115枚の希少な写真、および79枚の図表を掲げている。

本書は会館創立1世紀の「記念特刊」として編纂されたものであると思われるが、筆者がこれまで見た何百種類の華人社団の「記念特刊」と比べれば、はるかに高い研究水準を有している。一方、日本で近年来出版された研究書と比べて、同書は史料書としての価値が極めて高い。換言すれば、同書の最も大きな特徴は、まさに歴史の解釈としての「史」と、史実を記録する「誌」の両者を有機的に溶け合わせて一体にしたことにある。

戦後の華僑・華人は、中国志向（「落葉帰根」）から所在国志向（落地生根）へとアイデンティティの大方向転換を選択したが、1980年代以降、地域経済の活性化やグローバルな人口・資本移動の増加に伴って、一時期低調になった会館のような伝統的華人社団の活力が再び取り戻され、多くの同類組織は世界連合会の規模までに発展した。これを背景に、華人の現地化は進むものの、時代へのより柔軟・多様な対応が模索されている。こうしたアイデンティティの変容は、必ずしも「落葉生根」から「落地帰根」へと単線的に発展するようなものとは限らない。本書の出版は、これらの問題をいっそう深く考えさせるようなよい刺激を与えてくれると評者は確信する。

（武蔵野美術大学造形学部助教授）